



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	Questions of Immortality and Inquiring Mind in the Ghost Stories of Henry James and Edith Wharton [an abstract of entire text]
Author(s)	宮澤, 優樹
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(文学)
Dissertation Number	甲第13411号
Issue Date	2019-03-25
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74451
Type	doctoral thesis
File Information	Yuki_Miyazawa_summary.pdf



学位論文内容の要約

博士の専攻分野の名称：博士（文学） 氏名： 宮 澤 優 樹

学位論文題目

Questions of Immortality and Inquiring Mind

in the Ghost Stories of Edith Wharton and Henry James

（ヘンリー・ジェイムズとイーディス・ウォートンの幽霊物語における
不死をめぐる問いと探究心）

本論文は、19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて活躍した小説家ヘンリー・ジェイムズとイーディス・ウォートンが書いた幽霊を題材とする小説を、同時代に見られた学者らの形而上学的問題に対する探求との比較を通して検討する。ジェイムズやウォートンが活躍した時代において、それまで宗教や神学によって答えられていた問題が、科学的な調査によって解明可能であると仮定する一部の学者らによって追求されるようになった。知的階級に出自を持つジェイムズやウォートンは、そうした学者らの理論や活動にアクセス可能な立場にあり、そこから獲得された知識を幽霊物語の執筆において活用し、それらの作品において、学者らの活動に対する考察、批評を加えると同時に、同じ問題に対する独自の探求を行っていたと本論文は主張する。

本論文は 6 章から成る。導入部分においては、ジェイムズやウォートンが背景とする歴史的状況や、前述の問題に彼らに関心を持つようになった背景を俯瞰したうえで、両作家の幽霊物語に関する本論文での主張を概説する。第 1 章では、両作家の先駆者として知られるナサニエル・ホーソーンが幽霊について書いた文章を取り扱い、ジェイムズやウォートンの幽霊物語との差異を浮かび上がらせる。第 2 章と第 3 章はウォートンの幽霊物語について論じる。第 2 章では、ウォートンの“Miss Mary Pask”を分析し、中心的な役割を果たす語り手の存在がホーソーンの小説とは異なる独自のものとして表れていることを指摘する。第 3 章はウォートンの代表的な幽霊物語 3 編を取り上げ、そこに描かれる宗教やスピリチュアリズムについて考察する。第 4 章から第 6 章は、ジェイムズの幽霊物語について論じる。第 4 章では、ジェイムズがウォートンと同様の形而上学的問題への関心を抱いていたことを示し、第 5・6 章では、そうした関心が“Owen Wingrave”や *The Turn of the Screw* において、登場人物たちの探究心というかたちで表れていることを指摘する。

19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけて、死後に人格が存続するのかという問題を検討する学者らの集団が形成された。これは Fox 姉妹が霊と交信したとされる現象を発端とするスピリチュアリズムの流行と時期を同じくし、それに近い現象の科学的解明を追求するものであった。この運動の代表的な人物としてヘンリー・ジェイムズの兄である哲学者／心理学者ウィリアム・ジェイムズが含まれていることがよく示しているように、ジェイムズや彼と親

しく、かつ知的動向に精通するウォートンにとって、その運動は両作家にとって関心の対象であった。その関心は、彼らがしばしば書く幽霊物語の素材を提供し、かつ同問題に対する作家独自の探求を小説内において行わしめている。

第1章では、19世紀を代表する作家であり、ジェイムズとウォートンが強い影響を受けたとみなされる作家、ナサニエル・ホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の幽霊に関する文章を取り上げる。“The Ghost of Doctor Harris”において、ホーソーンは、自身が幽霊を見たという経験について記述する。ここでは、日常生活と幽霊を見るという体験がシームレスに接続されており、現実であるはずの日常と、非現実的な体験とのあいだに区別が存在しない。これはホーソーン（Nathaniel Hawthorne）のフィクションにおいても見られる表現である。ジェイムズの *The Turn of the Screw* へ影響を与えた作品としてしばしば挙げられる “The Wives of the Dead” においてもこれは同様で、現実と非現実を不可分に混合させようという意図が見られる。

一方で、第2章で検討するイーディス・ウォートンの “Miss Mary Pask” では、そのような現実と非現実の曖昧さが描かれるものの、それを判定する立場にある語り手が導入されている。本作品では、画家である語り手がフランスの海岸に住む Mary Pask という女性を訪ねた際、すでに彼女の葬儀に出席していたことを思い出し、目の前にいる女性が幽霊だと考える。物語の結末でそれは語り手の思い違いであったと明らかにされるが、これは Mary Pask が語り手に対して幽霊を自称していたことと矛盾する。このとき、語り手はこの矛盾のため Mary Pask について判断を下すことを拒否し、物語にはホーソーン（Nathaniel Hawthorne）の作品と同様の曖昧さが加味されている。しかし、Mary Pask が住む海岸に対し、語り手の風景画家としての自我を想起させる描写がされていたことを考慮すると、その曖昧さが語り手の内部で生じていると解しうる。そのような第三者的に現実と非現実を判断する立場の人物を設定している点に、ホーソーンとウォートンの小説における差異が見て取れる。

第3章では、ウォートンがキャリアの初期・中期・後期にそれぞれ書いた3本の幽霊物語を取り上げ、そこに描かれる宗教やスピリチュアリズムについて考察することを通し、ウォートンの形而上学的問題への関心が生涯にわたるものであったことを指摘する。初期の作品 “The Fulness of Life” では、スピリチュアリズムを提唱したことで知られる同時代の著名な思想家の名前を挙げ、彼らの死後に関する考えが正しかったという仮定のもとに執筆されており、さらにそれらを主人公の問題を解決させる手段として肯定的に描いている。中期の “Mr. Jones” では、すでに世を去った作家であったジェイムズやエドガー・アラン・ポーへの言及と、幽霊ではないかと疑われる執事についての探求を並行させ、作家が作品として死後に残るありさまが描写される。後期の “The Looking-Glass” では、ふたたび宗教やスピリチュアリズムについて直接的に言及しながら、信仰を持つことによって現世の問題を解決する登場人物が描かれる。ウォートンはしばしば合理的な考えを重視する作家として自分自身をみなしているが、幽霊というそもそも不合理なものを描く小説においては、そうした自身の一般的主張とは異なる見解が肯定的に存在する余地を見出している。

第4章では、ジェイムズの “Sir Edmund Orme” を取り上げ、ここに登場する幽霊のモデルとなった人物エドマンド・ガーニーとの比較検討を通し、ジェイムズがウォートンや同時代

の学者らと同様の形而上学的問題に対する関心を抱いていたと主張する。先行研究によって指摘されているように、ジェイムズは面識のあったガーニーを、小説内の幽霊の題材として用いている。本章では、そうした指摘からさらに踏み込み、ジェイムズはガーニーの行なった研究をも本作品の題材としてしていると主張する。ガーニーはウィリアム・ジェイムズらとともに The Society for Psychical Research に所属し、霊媒現象やテレパシーなどの調査を行っており、科学的な態度に徹して、しばしば感情的になりがちな素材を分析できる人物として、周囲の人物から評されていた。ジェイムズは幽霊にそうした性質を付与し、趣味嗜好のような非論理的態度によって行動する生者との対比を行うことにより、本作品の幽霊を特徴付けている。

第5章では、死後の生への探求というガーニーと共通する関心が、“Owen Wingrave”において、2名の著名な論理的思考者への言及というかたちをとっていると主張する。本作品は、家族の伝統から軍人となることを強要された主人公 Owen が、その伝統から脱しようとした結果、先祖の呪いと思われる死を迎える物語である。ここにおいて、Owen は不死を論じた古代の哲学者ソクラテスに喩えられ、若者の秩序を乱す者として、そして論理的な思考を行う人物として描かれている。同時に、この物語では、同時代に世に出た著名な探偵シャーロック・ホームズへの言及が間接的になされている。本章では、これらの言及が、結末における Owen の死の解釈に寄与するものであると解する。すなわち、彼の死を哲学者のように解くか、あるいは探偵のように解くかという立場の違いにより、作品の解釈が異なる。このような Owen の死にまつわる曖昧さが、死後の生をめぐる議論の曖昧さと結びついている。

第6章では、*The Turn of the Screw* において、“Owen Wingrave”に見られたような謎かけが反復され、読者を積極的にその解釈へと参入させる構成になっていると主張する。ショシャナ・フェルマンは、本作品が小説を読むことに喩えられていると考えた。本章では、その主張をひとつの土台とし、作品における謎かけにひとつひとつ応答する登場人物が、読者による作品解釈と並置されていると理解する。また、ジェイムズは、不死について記したエッセイにおいて、死に際する自我の消滅と継続との両面からこの問題への関心を表明している。この内容と作中における描写を比較しながら、本作もまた消滅と継続の間に横たわる不確かさに基づき書かれていると本章では主張する。

結論部では、ジェイムズとウォートンが幽霊や不死について記述したエッセイを引用しながら、そこに書かれる問題意識が、彼らの幽霊物語において発露していることを確認する。同時に、ここまでの議論が他作品の読解に寄与する可能性を示唆する。さらに、両者の同じ問題に対する観点の違いを明確にし、そのうえで、彼らの幽霊物語は同様の解き難い問題に対する探究心によって書かれていると結する。